

---

# 夢のレベル6！？皆暴走しろー！！

ドリアンマスター

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢のレベル6！？皆暴走しろー！！

### 【Nコード】

N5458M

### 【作者名】

ドリアンマスター

### 【あらすじ】

とあるシリーズより、完全なる作り話ですが、レベル6が誕生します。仲良し4人組、御坂美琴・白井黒子・佐天涙子・初春飾利の4人がチームを組んでミッション開始です！果たしてミッションコンプリート出来るのか…出来ないのか！

## 壱 はじまりは戦争！？（前書き）

美琴は中学3年になりました。春です。少し涼しいかんじです。ていつかunjで温かい目で読んでいただけると大変光栄です。

壱 はじまりは戦争！？

時は2×××年世界は大きな転機を迎えていた。ヨーロッパ大陸が世界地図から消え去りイギリスだけが大陸として半分残った。

東京は1/3が壊滅したが…

学園都市はとある戦争に勝利していたのであった。

「ちょっと黒子！そのアイスまだ一口しか食べてないのに！！ひどいっ」

「あらっお姉様。黒子はお姉様の体型維持のお手伝いをしているだけですよ。最近ではお胸の方にも多少の肉がついてきた様子で…」

「ばっ…何言ってるのよ！あんたわぁ！！」

「まあまあ。白井さんも御坂さんも落ち着いてください。今日はそんな話するためにここに集まったんじゃないんですから。ねえ初春。」

「と黒髪ロングヘアで花の飾りを付けている佐天涙子はこの場を仕切る。そう彼女は、このグループのリーダー。2日前に決まったというか…」

「じゃあ佐天さんがリーダーね！わたしそーいうかつたくてめんどくさ…あーじゃなくてえリーダーシップとれるし仲間を思える佐天さんが適任だと思うの！リーダーを守るのがわたしたちの役目ってわかりやすくていいじゃない！」

と1コ年上である茶色の短髪に名門お嬢様学校である常盤台中学の制服を着た御坂美琴に押し付けられたのであった。

「ーだいたい皆自分勝手に普段はまとまりないのよ…このグループはあー」

という思いを佐天涙子は口に出せずにいた。

佐天涙子・御坂美琴・白井黒子・初春飾利の4人は裏社会のグループ「ワンピース」のメンバーである。しつこいようだが2日前から…。

きっかけは佐天涙子の能力覚醒。彼女の能力は簡単にいえば予言能力、またの名を超高度並列演算能力<sup>アブソリュートシミュレーター</sup>。そうご存知の通り「樹計図の設計者」またの名がツリーダイアグラムである。とはいっても現状はレベル2。天気予報だってわかってもらってもせいぜい1週間先が限界だ。ただ演算結果内容次第では、能力が暴走するという結果を身体検査で残していた。

その能力覚醒を学園都市統括理事会の長であるアレイスター・クロウリーは待ちにまっていた。

「ー佐天涙子の捕獲を何よりも最優先とする…ー」  
「そうすれば学園都市は復活するぞ…。」

その一言で彼女たちの日常は変わっていく…。

壱 はじまりは戦争！？（後書き）

これから皆どうなるのか…！？

弐 とある桜の木の下で（前書き）

ちよつと前のお話です（・・・・・）

## 貳 とある桜の木の下で

### 4日前の話。

とある晴れた昼下がりに4人の少女は桜並木の下を歩いていた。

「やっぱり春といえば桜よねー。んー癒されるわね。」

美琴は伸びをしながら言った。

「そーですわね。桜に比べたらどこかの誰かさんの頭なんてブンコちゃんですわね。うふふ…」

「ちよつとー！白井さんヒドイです！私の頭をそんなものに例えな  
いでください！ってか頭について触れないでくださいー！」  
ぷんつとそっぽを向く初春を見て呆れる佐天涙子。

「ー今年も皆相変わらずだなあー」

と物思いにふけていたが、ここには平和があつた。

そこへ少年が現れた。

「あんた…だれ！？」

「おい！」

美琴はその少年の姿にビックリした。その黒髪のツンツン頭の少年  
上条当麻は身体の至るところに包帯を巻き付け片足引きずるように  
歩いていたのだ。

「お前ら逃げろ！佐天を…あいつらに渡しちゃダメだ！」

上条当麻は4人の少女に向かって言った。

「えっ逃げろってどこに？誰から逃げるんですかあ！？」

佐天は頭を抱え状況が理解出来ずにいた。

「それは私達の後ろをずっと付けてらっしゃる黒づくめの方のことを  
言っておられるんですの？」

「買い物の中から怪しいと思ってたのよね。拳動不審だし。」



「白井さん御坂さん気付いてたんですか！」

初春も訳がわからずパニックな様子で驚いた。

「で、あんたが傷だらけなのもそれが原因なわけ！？だ…大丈夫なの？？まさかあの戦争に参加してたとか…？今回は何なの？？なんで佐天さんが…まさか…」

「そうだ。美琴ならわかるだろ…。ツリーダイヤグラムがない今佐天の存在が学園都市にとってどれだけ重要か…あいつらは佐天をツリーダイヤグラムの変わりとして利用する気だ。」

「そんな…」

美琴は愕然と立ち尽くした。なぜなら、学園都市の存在の大きさを御坂美琴は去年思い知らされたからである。

「…今回の敵は学園都市ってわけ…」

美琴に絶望の思いが駆け巡る。

「ここは俺に任せてお前たちは第23学区へ行け！そこに頼れる人がいるから！早く！」

「で…でも…あたしだけでもあんたの力に…」

美琴が思いを全て伝える前に上条当麻は言う。

「いいから！あの子らを守るのは美琴だけだ！頼むぞ！！」

その言葉に従い4人の少女はターミナルへ走り出した。美琴は当麻のほうへ振りかえり、顔を赤く染め無事を祈ると皆のあとを追い走り出した。

「で…23学区に行くのってターミナル駅でほんとにいいの…？」  
美琴が呟く。行ったことのないところへ行く時には皆不安になるものである。いやいや、木山先生の子ども達助ける時に言ってますけど。

弐 とある桜の木の下で（後書き）

呼んでいただきありがとうございます！！

SUN 黒子はやっぱり変態！（前書き）

よろしくですー！

## SUN 黒子はやっぱり変態！

4人の少女は電車に乗っていた。第23学区を目指して。

「でも第23学区って空港ですよね！？誰が待っているんですかね！？もしかして…外国人ですか？？白井さんに人生を語った変な外国人とか！？それとも白井さんが尊敬してる変態外国人とか！？それともタイのオカマとか…」

「おだまりなさいな！このプンコちゃんがあー！！」

「白井さん…泣。」

「あの私…命狙われてるんですかあ！？なんで…これはまさか…七不思議！？」

「佐天さん…あなた全然状況がのみこめてないのね。」

美琴は状況を整理する。

「私達の能力は全て自分の頭で演算しそれを現実としているわ。あなたの能力は学園都市そのもののよ。あらゆる事例を演算し結果を出す。その結果は予言となるの。例えば2万通りの戦場を用意し2万体のシスターズを殺害することでレベル6に到達する者がいると演算されれば、それは予言として実行されてしまうわ。それがどんなに恐ろしいことかわかる？どんなに恐ろしい内容でも学園都市では結果が全て…その結果のためなら何でもするわ。つまり大きく言えば、佐天さんの演算結果が学園都市の全てってわけよ。」

「わたしの力ってそーいうことなんですか！でもわたしまだレベル2ですよ！」

「レベルなんて関係ないわよ！いつ能力が覚醒するかなんて誰にもわからないんだから！」

レベル1からレベル5にのしあがった美琴の言葉に皆黙ってしまった。

「これから私達どうなってしまうんですかね…。」

初春が力無く呟いた。

「とにかく第23学区に行きますわよ。あの殿方の言葉を信じて。」

「そうね。あのバカ…。つてか黒子！アンタパンツの中にスカート入ってるわよ！！なんで気付かないのよ！アンタのほうがバカだわ…。」

「きゃ！お姉様エッチですわー！それに黒子はバカじゃないですよ！これもわざとパンツ見せてると言いはりますのよ！おーほほほ！」

「あんた本物の変態だわ…。」

電車は第23学区へ到着した。4人の少女はターミナル駅を出た。そこにはアスファルトとコンクリートに囲まれた巨大な敷地しかなかった。

「誰もいませんの…？」

黒子が呟くとその少し離れた背後から足音がした。

「遅かったじゃねえかレールガン！こっちはだいぶ前からてめえが来るの待ってたんだよ！」

美琴たちが振り返ると、レベル5の第4位麦野沈利が腕を組んで立っていた。その回りを取り囲むようにアイテムのメンバー滝壺理后・絹旗最愛ともう1人新人らしい金髪の地面に付くであろう髪を折り返して止めている外国人らしい人がいた。

「やばっ…。」

美琴は思わず呟いた。

SUN 黒子はやっぱり変態！（後書き）

ほんとうにありがとうございました！暇つぶしにでもなって頂ければほんとうにほんとうに光栄であります（T・T）

ヨン様 アイテムの皆様は怖可愛い！（前書き）

どーぞ！ストリートファイターっすw（。o。）w  
すみません！嘘っす（-\_-;）

ヨン様 アイテムの皆様は怖可愛い！

麦野は挨拶代わりに原子崩し（メルトダウン）を放つ。

「くそっ」

美琴は皆の1歩前へ立ち、その四方八方へ襲いかかる特殊な電子線の向きを全て変えながら叫ぶ。

「黒子！佐天さんと初春さんを連れてここから逃げて！」

「でもお姉様。相手は4人しかも高位能力者みたいですし…」

「あいつらの狙いは佐天さんなのよ！それに黒子私を誰だと思ってるの！？わたしなら大丈夫よ。」

美琴は笑みを浮かべ振り返る。

その思いを感じとった黒子は素直に応じる。

「わかりました。お姉様どうか黒子が来るまでご無事で…」

「ダメよ…黒子。あつちにはどんなに逃げてても居場所を突き止める能力を持つ人がいるわ。だから佐天さんから離れちゃダメよ！あと…なおしたつもりかも知れないけどまだパンツの中にスカート入ってるわよ！」

「だからお姉様わざとですよー！」

「いつまでだらだら話してんだよ！」

と麦野は原子崩しを放つ。それを美琴は力をこめ麦野に向けて跳ね返すと同時に、黒子たちは一瞬でその場から消える。

「ちっクソガキが！」

麦野は、それを能力で盾のようなものを作り出し消し飛ばす。

「さっきの3人超追跡しますか？」

と絹旗は麦野に聞く。

「そうだな。お前ら3人はあつちを追って。このクソガキはわたしが潰す！」

「超了解しました。滝壺さん超急ぎましょう。」

絹旗と滝壺は佐天達を追うように走りだしたが、黒い壁に阻まれた。



「なっ……」

そこにいた5人を直径30mほどの円を描くように砂鉄が取り囲んだ。

「アンタレベル5のくせにレベル0に負けたらしいじゃない。そんなおばさん一人じゃ役不足なのよ！」

「……ってわたしも人のこと言えないんだけどー」

と美琴はどんな能力も聞かないレベル0の少年のことを思い出していた。

「超ナメられたもんですね。」

と絹旗は言いながら、美琴のほうへ方向転換し向かってくる。美琴はとっさに頭から電撃を放ち絹旗にぶつける。

「私の室素装甲にそんなものは効きませんから。」  
オフエンスアーマー

「えっ……」

絹旗は拳を握り美琴に向ける。美琴は磁力で眼前の床を持ち上げシールドを作るも、絹旗はそれを拳で容赦なく破壊する。その破片が美琴の身体を襲うもすぐさま電撃にて一蹴する。しかし電撃が間に合わなかった破片が肩に当たり美琴の表情が歪む。

「ぐっ……」

「……あの能力やっかいね。あの防御フィールド何なのかしら……」

「アイテムを甘く見ないで頂きたいものです。この黒い竜巻を消すことを超オススメしますが。」

「クソガキがつけあがってんじゃないやねえよ。」

麦野は手に力を込める。

ヨン様 アイテムの皆様は怖可愛い！（後書き）

呼んでいただきありがとうございます！アイテムの設定とかめっちゃくちやですみません（<―>）

**GO GOレールガン！（前書き）**

お姉様！早くやっつけてくださいましー！  
お姉様：おっねいさつまぁん（TOT）

## GO GOレールガン！

「はぁはぁ…」

美琴は、麦野と絹旗の2人を相手に戦っていた。原子崩しの軌道を変えながら、肉弾戦で挑んでくる絹旗の攻撃を地面を押し上げ盾を作ったり回避していた。

「チツしぶとい野郎だ。」

麦野は舌打ちしながら、四方八方に原子崩しを放つ。美琴はその電子線の軌道を変え絹旗のほうへ向ける。

「くっ」

絹旗は横へ回避しようとするも間に合わない。原子崩しは絹旗の体に直撃し、5mほど宙を飛び絹旗は地面に叩きつけられた。

「ちっ」

「次はあんたの番よ！」

美琴の眼前にはコインが宙を舞っていた。右手に触れた瞬間、音速の3倍以上の速さで超電磁砲が放たれる。

「なっ…やばっ！」

麦野は能力で盾のようなものを作りだすも、超電磁砲は止まらない。

「がっ…はぁ」

麦野は盾ごと跳ばされ、砂鉄の竜巻にぶつかりそうになった。その瞬間、美琴は砂鉄の竜巻を消し去り麦野はそのまま20mは吹き飛ばされた。

「絹旗！麦野！…」

さっきまで戦いを傍観していた女の子、滝壺理后が叫ぶ。彼女の能力はAIMストーカー。美琴の作った砂鉄の竜巻の中では、彼女はどうすることも出来なかったのである。滝壺は絹旗のほうへ向かって走ろうとしたが…。

「き…絹旗…いない…？」

「アイテムの实力は…こんなものじゃないです。あなたには超死ん

でもいます。」

美琴のすぐ背後より声がした。絹旗は拳を美琴の横腹めがけて振りかざす。

「なっ」

美琴はすぐさま砂鉄の壁を作り絹旗に向け砂鉄の竜巻で攻撃する。室素装甲にて体を守られている絹旗だが、あまりの衝撃に身を屈める。

「残念ね。私は電磁波で相手の気配が掴めるのよ。」

美琴はコインを掴みレールガンを放つ。絹旗の体は10m以上宙を飛び地面に叩きつけられた。意識を失った少女は倒れたまま動かない。

「このままじゃ引き下がれない！2人はわたしが守る。」

滝壺理后は美琴の前に立ちはだかる。そこへもう1人の仲間、金髪の女が初めて口を開ける。

「無駄な争いは止めたるよ。滝壺は2人を連れて引き返しなさい。あなたは私に着いてきたれよ。」

「この人が黒子に恋愛を語った変態外国人！？じゃなくて！だ…だれなの？そんな日本語誰に習ったのよ。」

美琴は目を見開いていた。

「失礼たるやつね！変態ではないわいな！」

## GO GOレールガン！（後書き）

呼んでいただきありがとうございます！まだまだ続くつす（@  
|  
@）

録 正しい日本語教えてください…（前書き）

魔術師になりたい…（――…）

## 録 正しい日本語教えてください…

「わたしの名はローラ・スチュアート。一応なんだけど必要悪の教<sup>ネセサ</sup>会の最大主教っていうのしたるよ。わたしイギリスからいろいろあつてここへ来たんだけどね。あなた達にお願いがありけるのよ。」と金髪の女は話す。

「お願いって…？」

「ー私達のこと何か知ってる？っていうかネセサリウスって何！？都市の名前かしら…ってことは市長してるってこと！？このふざけた女が…ー」

美琴は一瞬でいろんな思いがめぐった。そんな美琴を無視し、ローラは腰に手をあて告げる。

「わたしの下で働きなされよ！レベル5御坂美琴とその仲間たちや…！」

ローラの満面な笑みに美琴の顔が苛立ちを見せる。ローラは営業スマイルをやめ慌てて、

「すみません外人なので日本語難したるで、良かったら働いてくれまいか？頭さげたるよ。私変な人じゃないよー！」

美琴の苛立ちは治まらない。美琴は怒り出すとしつこいのであった。「全然なんのこっちゃわかんないのよー！」

「簡単な日本語たるよ！お前はほんとに日本人るか！？日本人の特有の仁義をお持ちではなさらんのかー！」

ローラはデタラメに喋り続ける。

「もーほんとに意味わかんないのよー。」

美琴は半分泣きそうに言ったのであった。

「ーもうほんとに嫌だ。こんな金髪と関わり合いたくないのよ。とりあえず…ー」

美琴は後ろに振り返り一目散に逃げだした。

「美琴さん！美琴さんよー！なんでだよーう」



ローラは泣きながら叫んだ。

何分くらい走ったか。ふーっ、と美琴は一息ついて黒子に電話をかける。

「黒子いまだどこにいる？さっき変な外人に絡まれて大変だったのよ！とにかく合流し……」

「誰が变だってのよー！」

美琴は顔を横に向けると汗だくだくの金髪が横に

「ぎいやああー！」

不覚にも美琴は気絶してしまった。ローラはわなわな震えながら叫ぶ。

「ほんとさっきから失礼極まりないたるよー！」

「……いさま！お姉様……！」

「んっ……。くろこ……」

美琴は黒子の膝に頭をのせ、黒子の腕に抱かれて、黒子の手の平が胸の僅かな膨らみを握りしめているのを感じた。

「なあにやってんのよ……アンタはあー！」

ビリビリと電撃が黒子を襲うも、なんだか幸せそうな黒子であった。

「ぎゃふーん……」

とある空港の駐車場の一角に皆は集まっていた。ローラ・ステュアートも一緒に仲間のような顔していた。

「……うっざあー」

美琴はため息をついた。

録 正しい日本語教えてください…（後書き）

（T・T）ご愛読ありがとうございます！  
次は新キャラ出るかもです（・・・#）

何なのよ とにかく佐天さんを守れ！（前書き）

すごい能力覚醒すると敵も多いんですね…。わたし…能力無くて良かった！バンザイ…（TOT）（TOT）

何なのよ とにかく佐天さんを守れ！

「あのーそろそろ話し聞いてほしいけど…よろしいか？」

ローラは恐る恐る口を開いた。

「どうぞ。お話になってくださいな。」

中学生の黒子は大人な対応で答えた。

「ありがとう。とりあえず、ここは敵に囲まれたる状態にあるから、どうにか逃げてこの紙にかかれた場所に来てほしいたるのよ。わたしは戦い専門ではないたるから一人先に逃げるけど、絶対にあなた達の力になりうるから信じたるよ。絶対来いよ！来なかったら私泣くわよ！」

皆にそう告げ、黒子に紙を渡したローラは、目をキラキラさせその場から消える。

「囲まれてるか…。」

紙に書かれた地図を見ながら美琴はつぶやく。

「ほんとにそこへ行くんですかあ！？結局あの人って何なんですかね…。まさかあの男の人が言ってた待ってる人…？」

佐天さんは複雑な表情をして聞く。

「あの人私達のこと知ってるっぽかったし…いまは頼るしかないのかも知れないわね。とりあえず今はここから抜け出すことを考えましょ。」

「紙に書いてあるのは隣の学区のとある教会ですわ。ターミナル駅に戻るのには危険ですし、走ったりテレポートしながら地道に行きますのよ。」

「白井さんのテレポートって2人までですもんね。3人一気に出来れば難なく抜けれたのに残念です。」

初春は悪気なく言っのを美琴はスルーする。

「さあ行きましょ！」

「はあ。もうすぐ隣街ですよ。」

「黒子お疲れ！もう少しがんばろ！」

敵に見つからないように黒子がレポートにて先回りしルートを探り、4人は進んでいた。

「はっ！」

黒子の前に2人の影が立ちはだかる。大学生くらいの茶髪で180cmはある長身の男は、微笑んでこっちを見ていた。

「お嬢様達どこへ行くの？」

「ちよつとダイサク〜！どこだっていいのよ。私達には関係ない〜。」

そう答えたのは、ピンクのロングヘアにバッチリメイクのお色気ムンムンな20歳くらいの女だ。

「君たちに危害を加える気はないよ。じゃあ、その子をこっちに渡してくれるかな？はは。なあマリ！」

「そうそう！渡そ渡そ〜！」

地面を跳ねながらきやぴきやぴと女も男の後に続いて喋る。

「なんだか知らないけど、それは無理な話よ！」

美琴はバチバチと電流を漏らしながら、皆の1歩前へ出る。

「黒子わかつてるわね！」

「はい。お姉様…。」

黒子は心配そうな表情で答え、佐天・初春とともにレポートする準備をする。

「そうはさせないのよ。あたしの能力もレポートなのなの。レベルもあなたと一緒にだし〜。仲良くしてして〜。」

「えっ…」

黒子が一瞬戸惑った間に、マリはレポートし佐天を掴むとダイサクの横へレポートする。

「そういうことだから。はは。じゃあ…」

「ちよつと待ちなさいよ！あとなんか2人とも話方イライラするの

「よー！」

ダイサクが話すよりも先に美琴の電撃が飛ぶ。しかし、そこにはダイサクの姿はない。

「お嬢さん可愛い顔してるが、喧嘩っばやくてしつこそうだな。はは。」

美琴のすぐ後ろで声がした。マリのテレポートによりダイサクは移動したのだ。頭に血が登っている美琴は驚く。

「しまっ……きゃー……！」

何なのよ とにかく佐天さんを守れ！（後書き）

ご愛読ありがとうございます！

能力の幅とか使い道って難しいですね！（T・T）

とりあえずエレクトロマスターを極めたいです（x|x）笑

八 失敗したってどーにでもなるよ！だって自分の気持ち次第だから

（前書き

人生悩む時も後悔する時もあるけれど周りからすればどうってこと  
ないことってよくありますよね（・・・・・）そう！それは自分の中  
だけの小さなこと…気持ちの持ちようで世界は変わる！皆世界を変  
える力を持っているんだよーい！！

って信じてます（TOT）



## 八 失敗したってどーにでもなるよ！だって自分の気持ち次第だから

ダイサクは美琴の手を取り、力いっぱい引き寄せる。そして抱きつく。

「なっ」

美琴は顔を真っ赤にし、ダイサクの胸に顔をうずめながらすぐさま電撃で反撃する。が、電撃がうまく出ない…。

「お姉様に何してますの！！ふーふーふんがあー！お姉様早く反撃してくださいませーい！！お…お姉様！？」

憤慨していた黒子も美琴の異変に気付く。

「ち…力が入らない…。なんで…。」

「ぼくの力はA I M放出なんだ。僕は手に触れてる人の力を外に放つことが出来る。はは。君の力はどんどん抜けていくよ。」

ダイサクは美琴を支えながら話す。

「やば…。足にも力が入らない。気を失っ…だめ…。」

美琴は自分の体を支えることも出来なくなり、がくんと膝が折れダイサクにもたれかかり、虚ろな表情になっていく。そんな美琴をダイサクは両手で抱き上げて喋る。

「はは！可愛いね。君も連れて行きたいくらいだ。」

「だめだめよ…。その子を連れて行ったら、次はあたし達やられちゃうかも…。行きますよ。」

「そうだね。はは。行くでしょう！またね！」

ダイサクは美琴をぎゅっと抱き締めると、床に優しく寝かせる。美琴はゆっくり目を閉じながら、マリがレポートするのを見た。

――佐…天さ…――

美琴はとある教会で目が覚めた。

「お姉様！」

「御坂さん大丈夫ですか！？」

黒子と初春は美琴の側で、ずっと心配そうな表情をしていた。

「一人足りないように見えたるけど。」

ローラ・ステュアートは言う。少しの沈黙のあと、美琴が口を開ける。

「私…佐天さんを守りきれなかった…。レベル5なのに……。私…油断した……。」

「お姉様…。」

黒子も何も出来なかった気持ちでいっぱいだった。今頃佐天さんとは思うと、皆に絶望の思いが走る。ローラは椅子から立ち上がる。

「今からあなた達にはグループを組んでもらいたるよ。その指揮官はわたくしローラ・ステュアートなり。指揮官より、あなた達にグループ名を授けたるぞ！」

「はい！！？何を言ってますのん。」

黒子が口を挟むのをローラは気にもとめず話し続ける。

「その名は…そうねえワンピース！一つの平和のために戦うってどう！？」

「平和…。」

美琴は脱力した上体を起こした。

「わかったならとつと皆であの子の平和な日常を取り戻してきたれい！！指揮官の命令は絶対たるぞ！！」

「ー助けるつつたつて…ー」

絶望の中にいた3人だが、その言葉に思わず笑みがこぼれる。やることは決まったのだ。思いは一つ、佐天さんを助けたい！

Q 指揮官は任務成功を本当に望んでいますか？（前書き）

落ち込んだ時、救ってくれる一言って大事ですよ（――）自分  
分はその言葉毎日くださいー！！  
皆ミッショインポッシブルー！！

Q 指揮官は任務成功を本当に望んでいますか？

「それでは指揮官！作戦をお願いします！」

希望に満ちた表情で初春はローラに尋ねる。

「え…作戦なんてないのよ！あなた達のがんばりのみなるけど…じやだめ！？」

「じやだめですよー！」

黒子は一喝する。

「佐天さんがどこにいるかもわからないですし、意気込んだまでは良かったのですが…お先は真っ暗ですのね。」

「そうね…。」

美琴も険しい表情をする。ローラは美琴の肩に手を置き、慰めるように優しく話すかけた。

「居場所くらいなら知りえたるよ。あと捕らわれた目的も。」

「ちょーい！アンタ何なのよ！もーほんとにこの人嫌い…。」

美琴はそう言っただけ息をついた。ローラはやっと知っていることを全て話した。

「では話をまとめますと、佐天さんはレベル6進化論の演算のために連れ去られたと、そして今もそのとある研究施設にいるということですね。」

黒子は話を続ける。

「その施設の内部情報や敵戦力など情報不足は否めませんわね。お姉様。」

「そうね。初春さんが携帯してるPDAで何か情報掴めないかしら。」

「調べてみます！」

初春が動きだすと同時に、午前0時をすぎ日付が変わった。夕方までは、4人で楽しく遊んでいたのに今では世界が変わってしまったような…そんな重い空気が流れる。教会の周りに建物はなく、自然

に囲まれた広大な土地のため不気味なくらい静かだ。

「一刻も早く佐天さんの無事を確認したい――」

皆そう思っていた。

「ありました!」

「さすが初春さん!」

「えっと、そこでは多才能力を使えるレベル6への進化について研究してるみたいです。これが内部地図ですので印刷しますね。今回警備にはグルーブっていう裏社会の小組織と大学生裏サークルのゴリラってところで総勢7名です。あと研究員が何人かいるみたいです。」

「ゴリラってさっきの2人組かしら…ピッタリな名前ね!よし!これで大体のところはわかったわね。黒子と私がペアで動いて佐天さんの救出、初春さんは外で侵入・脱出経路の検索・指示をお願い!」

「で、アンタは…」

「私は指揮官たるゆえ、遠くで見守らせてもらいたる!」

「はいはい。」

やっと美琴も慣れてきた様子で、彼女を受け流すことに成功した。

そして、美琴は黒子と初春の肩に手をやり円陣を組ませる。

「じゃあ取り返しに行くわよ!一人の平和を…皆の日常を取り戻すため…私たちの友達佐天さんを!」

3人は互いに目を合わせて頷いた。

「はい!」

「ちよっと、なんでわたしハブリたるの!ひ…ひどい…プン。」

ローラはいじけてしまった。そこに指揮官の威厳は微塵もなかった。

Q 指揮官は任務成功を本当に望んでいますか？（後書き）

ご愛読ありがとうございます（T・T）ほんとにローラは偉大な人です！笑

でもグループってあの人がいるのでは……お姉様大丈夫ですか！？勝てるのか……？

いやっムリムリ……化け物いるよ（TOT）

十 進め！敵は地下にあり！！（前書き）

敵は！本能寺にあり！！

パクってみました（-|こ） z z z

敵は強そうなり…。

## 十 進め！敵は地下にあり！！

とある研究施設の近くに3人は来た。見た目にはそれほど大きくない研究施設は、コンクリートで出来ており最上階の2階に1つ窓がある。あと、入り口は2箇所あり表は鉄格子に南京錠、その内側はシャッターが締まり電子ロックされている。裏口は電子ロックのみだ。

「裏口からの侵入は簡単だけど…畏かしら！？」  
美琴は頭を悩ます。

「でもお姉様。この施設は地下10階建てですので、地上のどこから入っても一緒かと。初春！侵入ルートはどうなってますの！？」

「はい。モニターによれば佐天さんは地下9階にいる様子です。あの2階の窓のある部屋のちょうど下の部屋になりますね。エレベーターは大小の2つ、階段はメインと非常用の2つです。基本は白井さんのレポートで行きましょう！小型通信機でわたしが正確な座標をお伝えしますので、任せてください！どーしようもなくなった時の必殺技は地下に向けて超電磁砲を打つのが良いと思います。」

「その必殺技は使いたくないわね。」

美琴は苦笑いする。

「じゃあ行くわよ！」

「くれぐれも気をつけたるよ。危ない時は逃げる！あの子は間違いない限り殺されたることはないんだから。」

ローラは真剣に2人に告げる。美琴と黒子は小さく頷き、闇の中へ走り出した…。

「よし！これで施設内のセンサーや監視カメラに私達は反応しないわ。じゃあ、あの窓の内側にテレポートして潜入しますか！初春さんそこに人はいるかしら？」

「地上階には誰もいません！」

初春はすぐに答える。黒子は美琴を連れ、窓の内側にテレポートす



る。

「なんだか静かね…。」

美琴達は奥へ進んで行った。

「地下9階とある個室」

「敵が侵入してきたみたいだにやー。」

グループの一員である金髪にサングラスの少年、土御門元春は言った。

「ほんとに外部から接続してるこのカメラにしか写らないんだなあ。ここ過ぎればどこにいるかわかんなくなるぞ。大体こんな一般人の女の子相手だとは聞いてないにやー。」

「けっ！またあいつかアよオ…。何やってエんだア。」

と呟く白い髪に黒いシャツの少年は、学園都市が誇るレベル5の頂点一方通行である。グループの一員である彼は、美琴と何度か顔を会わせたことがあった。

「まさか御坂さん…。」

同じくグループの一員である爽やかそうな少年は、常磐台中学理事長の息子の海原光貴の姿をした魔術師。彼は美琴のことが好きなのである。

「あ…あのツインテールのレポート女は…。あの時の…………。」  
ぶるぶる震えながら話すグループの一員の少女は結標淡希。能力は座標移動・レベル4であるが、以前黒子との激闘にて精神的に追い詰められたのだ。

「にやんだあ！皆知り合いかあ！？人のこと言えないけど。あの子当麻の知り合いだしなー。こ…これはやりにくいにや…。」

## 十 進め！敵は地下にありー！（後書き）

ご愛読ありがとうございます！って毎回書いてますが、本当は愛読してる人がいないなんてこと…（TOT）ネガティブシンキング中です 毎日の日課なんで気にしないでください！笑

イイヨ 私たちにはあなたが必要なんだから！（前書き）

演算って難しいですね（TOT）

努力で演算能力は上がりますか！？自分だけの現実はいっぱいあります…笑

イイヨ 私たちにはあなたが必要なんだから！

そんな微妙な空気を一方通行が一掃する。

「あアでもよオ仕事だろオが！俺は全力でいくぜエ！」

その時、個室のドアが開く。

「はは。怖いですね！でも今回は僕たちに任せて頂きたい！」

「そうねそうね。」

部屋の入り口にダイサクとマリが立っていた。

「君たちが手柄を取りたいのはわかるよ！何故ならあの子を誘拐したのも僕たちの手柄だからね。はは。嫉妬とかやめてくれよ。僕だつて……」

「是非ともお願いします！」

一方通行以外の3人は、声を揃えて頭を下げたのであった。

「地下9階実験場」

佐天涙子は体の複数の箇所にも電極を付けられ、椅子に座った状態で手足を縄で抑制されていた。

「いいか。君の仲良い友達の無事を祈るなら、素直に言うことを聞けてんだ。どーせてめえはこれから先一生裏組織に追われるはめになっちまってる。皆がためえの能力を利用するだろうよ！わかつたらこの書類に目を通し、今すぐに演算しちまえ！」

オレンジ色の髪をした白衣姿の細マツチヨの男はそう言つと、書類を佐天の目の前に置く。

「……そつか……。私もう前みたいな生活には戻れないんだ……。もう一生……」

佐天は絶望するしかなかった。力なく顔を下に向けると、偶然書類が目に入る。

「……レベル6への進化論・多能力者……うつ……なに……？気持ち悪い……」

「ううー…うわああ！」

佐天の目が血走り苦痛の表情になる。その直後、演算結果が電極を通してコンピューターに現れた。

「オリバーさん！すごい結果が…」

パソコンの前にいた科学者が、オレンジの髪の子に向かつて叫ぶ。

「ま…まさか。」

オリバーは驚いたがすぐに笑う。

「今日が素晴らしい日になるかもしれないな。」

「はあはあ…なに…いまの!？」

佐天は気を失いそうなほど疲労していたが、演算結果ははつきりと覚えている。

次の瞬間オレンジ色に光る槍が、ドゴオツと地下9階の実験場の壁を貫く。佐天は見覚えのある光に一瞬笑みを浮かべるも、すぐに陰しい表情になる。

「ー来ちゃだめー」

「御坂さん白井さん…私のことはもういいですから来ないでください！」

佐天は目に涙を浮かべ叫んだ。

「ふふ。良いタイミングだ！せっかく来たんだからよ、てめえらも保護してやんよ！」

オリバーは美琴たちに向けて言う。

「佐天さん。もういいなんて言わないで。私はあなたを連れて帰る。あなたの居場所は私達を守る！これから先もずっと守るんだから！」

美琴は力いっぱい叫んだ。

「裏社会を知らない世間知らずのお嬢さん。はは。可愛いけど甘いよ！君たちは逃げることなんて出来ないんだから。」

コンピュータールームよりダイサク・マリが近づいてくる。

「さあ始めよ始めよ。」

イイヨ 私たちにはあなたが必要なんだから！（後書き）

ご愛読ありがとうございます！

レベル6の演算結果謎ですね（- - ;）

自由に 最強の敵…だめだめー！お姉様！落ち着いてくださいまし…（前書き）

VSですの！お姉様の戦闘…ブルーレイに納めたいくらいですの！  
オホホ…

じゃなくて…黒子はお姉様の力になります…（＜＞）お姉様大好き  
です…。

自由に 最強の敵…だめだめー！お姉様！落ち着いてくださいまし…

「あいつら…！」

美琴は拳を握りしめ青白い光をバチバチさせる。

「ふふつ。」

ダイサクとマリはゆっくり歩いて向かってくる。次の

瞬間2人は姿が消える。

「私の体からは常に微量の電磁波が出てるから気配がわかるって言うてんのよおー！」

美琴は後ろを振り返ると、左手の平を開き青白い光を放つ。

「くっ！」

ダイサクとマリは慌ててテレポートする。

「あんた達の戦略はばれてんのよ。常に二人一組で行動して、テレポートして近づいて能力を奪うしか脳がないでしょ！」

美琴が話すと同時に、ダイサクとマリは体をびくつとさせる。

「ふふふつ。だからって君に僕達を止めること出来るかな…な…」

美琴は磁力でダイサクとマリのいる床だけ、1m以上ゴゴツと勢い良く持ち上げる。

「きやつきゃ〜」

そして、持ち上げた床だけを磁力で横に飛ばした。ダイサクとマリは美琴が飛ばした床にできた深さ1mくらいの穴の中に落ちる。

「ぐは…。レベル5…。なんてパワーだ…。」

ダイサクが上を見上げると美琴の右手があつた。そこから青白い光が放たれ、二人を直撃した。

「黒子！いまのうちに佐天さんを解放しましょ！」

黒子は佐天が座つてるところへテレポートし、佐天を連れ美琴のもとへ戻る。

「よし！逃げるわよ…。」

美琴はそう言いかけて、背後より殺気を感じ振りかえる。



「ア…アクセラレータ…。」

美琴の顔に恐怖が走る。しかし、今は守るべき人がいる美琴は逃げられない。

「私がこの子たちを守るー」

「黒子！あんたは佐天さんを連れて逃げなさい！」

「でもお姉様…。」

「いいから！早く…！黒子危ない！」

美琴は叫んだが、遅かった。一方通行がさっきまで佐天さんが座っていた椅子を蹴り、バラバラになった破片が黒子を襲った。鋭い刃が右胸・腹部・両足に刺さり、黒子は多量の出血をし倒れる。

「いやああああー！ー！」

隣にいた佐天は絶叫し倒れた黒子に呼び掛ける。

「白井さん…し…らいさあ…ん…ひい…くつ。」

黒子は動かない。

「く…ろこ…。うそ…いやっううわあああ！！アクセラレータあああああ…！」

美琴は絶叫しながら真っ直ぐ一方通行に向かっていく。電撃を一方通行の周りすれすれに浴びせる。次の瞬間床や壁の鉄筋コンクリートやパイプを数えきれないほど膨大な量を一方通行にぶつける。一方通行に当たった瞬間に跳ね返るも、美琴は床を持ち上げ盾を作り防ぐ。そして盾をぶち壊すように、その後ろから超電磁砲を放つ…が一方通行はびくともしない。

「ー…こんなじゃ駄目だ！力が欲しい！あいつを倒す力が…くそ…黒子…くろこおー」

自由に 最強の敵…だめだめー！お姉様！落ちてきてくださいまし…（後書き）

ご愛読ありがとうございます！大大ピンチです（・・）黒子は重  
体で一刻も早く病院へ…

でも敵を倒せるのか…（・・）最強です。

十参 力をください…あいつを倒し、あの子を助けるくらいの力でいいんです

時に力は誰かを守れるけど、傷付けることもできる。  
ほんとに必要な力だけあればいいのに…

(・|・;) v

十参 力をください…あいつを倒し、あの子を助けるくらいの力でいいんです

「俺には時間が限られてエんだからよオ、とつとと終わらせよオーぜ。」

一方通行は空気をベクトル操作する。美琴から放たれる電撃に反応し、美琴の周りの空気が爆発した。瞬時に両手でガードするも、ドゴオツという音とともに美琴の体は10mは宙を飛び地面に叩きつけられ横向きに倒れる。小型ランシーバーは粉々になる。

「い…たあ…。」

かろうじて意識はあるが、体に力が入らない。佐天と黒子の近くに飛ばされたらしく、美琴はすぐ横で佐天が目には涙を浮かべているのを見た。美琴は手を握りしめる。

「ー負けられない…。早く倒して黒子を病院に連れて行かないと…。立て…立たなきゃだめよ…。お願い…黒子を助きたいの…。」

美琴は上体を起こし一方通行を睨む。

「学園都市1位…だから…って…偉そうにしてんじやないわよ!…殺してやる…。黒子のこと絶対に許さないんだからあ!…」

「えっ…。」

佐天は驚きを口に出す。今まさに頭をよぎったことが信じられなかった。

「ーあの人が1位…。ってことはもしかして…。」

佐天は状況を把握する。

「御坂さん…私に電撃を浴びせてください。」

佐天は真剣な眼差しで美琴に言う。両手を地面に付き座っている美琴は驚き、困惑した表情をする。

「え…なんで!？」

「とにかくお願いします!」

「そんなこと出来ないわよ!大体アイツを倒さなくちゃ…。」

「御坂さん!アイツを倒すためです!零距离からの電撃を手加減し

て…でも私を倒すくらいのもを…わたしを信じてください…！」  
佐天の気迫に美琴は押される。

「………わかったわよ！どうなっても知らないんだから…。」  
そう美琴が言うと、佐天は美琴に抱きつき胸に顔を埋める。

「信じてくれてありがとうございます。御坂さんお願いします…。」  
美琴は零距离からの電撃を放つ…。バチイイイイ！！

佐天は気を失いかけた。その時…

「えっ…」

「…これって…佐天さんの頭の中…！？さっきの電気攻撃で佐天さんの頭の中とリンクしちゃったんだわ…。こ…これは…！！！！！！」

佐天はふらふらしながらも黒子と手をつなぐ。

「…うう…。今度は何！？こ…これは…黒子…！！！！！！」

「佐天さん…わたし…わかった。ありがとう…。アイツを倒さなくちゃ。」

美琴はゆっくり立ち上がる。

「おいイ！別れの挨拶はすんだのかア？？じゃあ時間は待ってくれねえんだからなア。行くぞオ！」

一方通行はゴウツと足元をベクトル操作し、もの凄いスピードで美琴に迫る。美琴は同じスピードで一方通行に突っ込んだ。同じスピードで…。……。お互いがぶつかり火花が散る。

「なっ。どーいうことだよオメエ…！」

一方通行は理解出来なかった。

十参 力をください…あいつを倒し、あの子を助けるくらいの力でいいんです

ご愛読ありがとうございます！

なんか急展開してみました。美琴はどうしちゃったんでしょうか…

( - - # ) 愛の力v (^o^ )

十四 予言：全ての条件が揃った時人は未知の世界へ。それがあなただったな

美琴さん（@ | @）頑張つて（TOT）

#### 十四 予言：全ての条件が揃った時人は未知の世界へ。それがあなただったん

「私：今なら何でも出来るわ。アクセラレータあんたは私が倒す！」  
美琴は空気を操作し、そこへ電撃を流し爆発させる。

「なっ…にイ。」

一方通行には爆発は効かない、全て反射したが驚きを隠せない。

「あんたのベクトルを逆転してあげるわ！」

美琴は一方通行の頬を触り、ベクトル操作する。そして能力を放出させる。

「この能力はアヤツのじゃねエのかよオ！！ち…ちからが…」

一方通行はダイサクの方を見ながら信じられない様子で叫ぶ。

「これが…！！ふふ…はははは！！とうとうやつちまったんだ！！

学園都市の夢：レベル6だあああああ！！」

今まで陰で身を隠していたオレンジ頭のオリバーは叫ぶ。

「はは…零距离からの電撃を浴びせることで、御坂美琴の脳波が佐天涙子の脳波とネットワークを構築、様々な脳波を電気信号に変換する演算を修得。そして佐天の演算能力を介することで白井黒子の脳波の電気信号化に成功する。そして、レポート能力の演算を理解すれば…脳波ネットワークを零距离からしか結べない状態でも次は佐天や黒子に触れずに脳波のネットワークをレポートさせ、パ―ソナルリアリティーの演算を電子記号化し解読できるってわけだ。御坂美琴はA I M拡散力場の集合体となった。つまりあの子は…多才能力者ってことだ。誰も彼女を止めることは出来なくなっちゃったんだ…。オレらの手では、とても彼女を制御出来やしねえじゃねーか！くそつたれが…」

オリバーは、美琴を支配できる状態にしてからの能力覚醒を望んでいた。一方通行が床に倒れると、オリバーは腹の底から悔しい様子で床に四つん這いになり、右手で地面を叩く。  
美琴は、オリバーのことなど気にも止めない。



「くろこ…！」

黒子のもとに駆け寄る。出血をして15分近く経っていた。佐天が傷口を圧迫し応急処置をしていたが、誰が見てもすごい出血量で美琴は背筋をぞくぞくさせ、がくがく震える。黒子の呼吸が今にも止まりそうだからだ…。

「病院まで間に合わない…どうしたらいいの…。黒子をたすけ…る  
ちか…らを…。」

美琴の声に反応したのか、研究場の入り口から一人の男が入ってくる。

「常磐台のお嬢ちゃん！そんな能力が覚醒するなんて聞いてないにやー。」

金髪にサングラスの土御門元春だ。

「あんたは、あのバカの友達…？なんでここに…？」

美琴は何度か街で見かけたことのある顔に驚いた。

「オレは裏社会の組織、グループに所属する土御門元春っつー者です。アクセラレータが大変お世話になりました。お嬢さん…。」

「なっ…！！！」

美琴は殺気を感じるも、黒子の側から離れられない。いや、離れたくなかった。美琴は土御門元春を睨み付け、絶望の中を葛藤した。

「ーまさかコイツが…戦うしかないの…そんな時間なんて…黒子…

…くろこを助けたいのに…一瞬でコイツ殺してやるのか…

！……

十四 予言…全ての条件が揃った時人は未知の世界へ。それがあなただったな

ご愛読ありがとうございます！無理矢理な設定ですみません（T・

T）もう何でもアリだと…笑

ビリビリが夢の学園都市第一位に！笑

そんなことより黒子を助けられるのでしょうか…（T・T）

十誤 ウソつき………ほんとほ、私たちを…？（前書き）

あなたどんな時嘘をつきますか！？

自分を守りたい時に言ってしまう弱い人間かも…（T・T）

だめだ！！笑

皆偉大なウソつこうな！！

十誤 ウソつき……………ほんと、私たちを…？

美琴は睨むのを止め、土御門元春に背を向けると黒子の元へもう1歩寄る。そして、今までにないくらい強く強く黒子を抱きしめた。

「黒子、大丈夫だよ…。わたしがあなたを助ける。絶対に助けるんだから…。」

そして隣で倒れている佐天さんの手を美琴は握った。佐天がうつすら目を開けると、まるで美琴が黒子と最後の時間を噛み締めているように思えてならなかった。佐天の両方の目から大粒の涙がこぼれ落ちる。止まらない…。

「し…らい…ひい…ぐう…さあん…。」

その声は彼女に届かない…。何故なら…

「…。…」

「ひいつく…あれ…。何か騒がし…」

「おっねいさま…！！もつと黒子を強く強く抱いてくださいまし…  
~~~~！！黒子は黒子はあそれだけで元気になりますかつらああん！」

何故なら黒子は美琴に夢中だからである。

「えーと…」

佐天は目の前の光景が信じられない。

「涙を返せ！」

「ーじゃないじゃない！思わずツツコンでしまったけど…ー」

「こ、これが…愛の力…！？まちですか！」

佐天は目をキラキラさせて言う。

「違うわよ！バカ！」

美琴は顔を赤くし佐天さんを叩く。

「痛いです！。はは！」

それを10m先で眺めていた土御門元春は、そろそろいいかと口を開く。

「うーん…やっぱり今日は任務失敗ってことで、もう帰るにゃー。

オレじゃお嬢ちゃんには勝てそうにないし、また作戦練ったほうが良さそうだしな。じゃあねーお嬢ちゃん達。元気でにゃー。」  
そう言うと土御門元春はスキップしながら帰っていく。

「御坂さん…あの何しに来たんですかね！？御坂…さん??」

佐天は視線を横に向けると、美琴は軽くお辞儀をしていた。顔をあげ、美琴は一息おく。

「私たちを助けてくれたのかな。あの人の能力肉体再生だったの。でもレベル低すぎて使いものにならない程度よ。だから佐天さんの頭脳を介して演算能力をあげてみたんだけど。だ…だからほんとにその気があつたか分かんないけど…あの人に助けられちゃった。」  
美琴には、あの人が戦う気もないのに現れたとは思えなかった。  
「そーでしたのね。何はともあれお姉様、佐天さん！黒子は本当に感謝しておりますの。ありがとうございました。」  
3人は笑いあつた。

「任務成功ね！帰りましょ。」

美琴は2人の肩に手を置きスキップした。

「ーレベル6んだとオ…。俺が守ろうとしたもんはなんだア！オレは…なアんで寝てんだアよオ…わかんねエ…なにもわかん…ー」  
その時ゴォツと音がし地下9階は黒い殺気に包まれた。

「研究施設地上1階」

「いやあ今回の任務はやりにくかったにゃー。上に何て報告するよ？」

土御門元春は話す。

「僕なんて、御坂さんの前に出ることも無理でした…。でも久しぶりに会えて良かった！」

「海原！てめーはアホか！？まあ私も人のこと言えないんだけど…。」

とグループの一員の結標も続く。

「あのバカも力が戻れば自力で帰るだろーし、今日のところは解散するとしましょーかにゃー。」

皆それぞれ帰ろうとした時、地下から爆発音が聞こえ地面が揺れる。  
「なんだあ…まさか!？」

土御門元春は嫌な予感がし、地下へと降りようとした…がその時後ろから声をする。

「俺も一緒に行くぜ。」

土御門元春はその声ができる方をみて笑う。

残りのグループの2人は気にせず闇の中へ消えてしまった。

十誤 ウソつき……………ほんとほ、私たちを…？（後書き）

ご愛読ありがとうございます！

黒子が無事元気になりました！

最後何やら不穏な展開ですね。次回に続く！

十録 ヒロインのピンチを救えば…どんなに腐ったヤローでもヒーローになれる

目の前に可愛い女の子が助けを求めているなら、是が非でもそのチャンス逃しちゃダメです！だってヒーローになれるんだから（Ｔ－Ｔ）

そうウィリアム・オルウェルだ！



十録 ヒロインのピンチを救えば…どんなに腐ったヤローでもヒーローになれる

美琴は慌てて後ろを向くと、黒い大きいものが見えた。

「羽…？」

その中心にいたのは…

「アクセラレータ…！」

美琴は思わず呼んでしまう。しかし、どこか様子がおかしい。

「この能力は何なの。え…演算出来ない！？？」

美琴には一方通行の能力が理解出来なかったが、恐怖を覚えるほど不気味なものだと感じた。美琴は黒子と佐天さんを外へレポートさせる。

一方通行はゆっくり手を動かした。それだけのことなのに、ゴォツと凄い衝撃が美琴を襲う。美琴はベクトル操作し衝撃を反射するも全てを演算出来ない…。美琴はその衝撃を全身に受け5m先の壁に背中からぶつかる。

「く…つ。」

美琴は地面に座り込むも、すぐに手を床につき起き上がり次の攻撃に備える。

「…やばっ。衝撃を抑えきれない…！」

一方通行はさらに手を動かす。美琴は磁力で床を持ち上げ周囲に盾を作り、ベクトル操作にて衝撃を和らげるも徐々に体が悲鳴をあげる。

「ぐっ…は…いた…た…」

美琴は膝と両手を床につけ、下を向いていた。

「…はは…。レベル6とか言われても結局佐天さんがこの能力を演算出来ないと私は何も出来ない。私死んじゃうのかな…！」

次の瞬間一方通行は両手を動かす。今までにない衝撃が美琴を襲う、…襲わない？

美琴が顔を上げると、後ろ姿が見えた。黒いツンツン頭のその少年

は上條当麻である。

「大丈夫かあ？」

美琴は下を向き小さく頷くが、当麻のほうを見ようとしない。その眼からは大粒の涙が流れていた。美琴は助けにきてくれたことが嬉しかった。いや、上條当麻が来てくれたことが嬉しかったのか。

「上やん、ありゃ暴走だ。止める方法は今のところ一つしかねーんだけどなあ。」

「ーラストオーダーがいないと話しになんねえんだよなー」

土御門は頭をかく。

「どーにか出来ないのかよ！」

当麻は衝撃を右手で消しながら言う。

「あの医者に言ってみつか。」

土御門はそう言うと言電話をする。

当麻は美琴をチラッと見て心配そうな表情をする。美琴は涙を手で拭い立ち上がる。

「私にも何かできる？」

美琴の素直な態度に当麻はドキツとする。

「そんな良いムードなんていらなんだにゃー。」

土御門が言うと2人は顔を赤くし、そっぽを向いてしまう。

「じゃあ作戦開始するんだにゃー。」

そついうと、土御門は2人に作戦を告げる。

「かなり危険じゃねえか！俺……。」

当麻は作戦の内容に愕然と肩を落とす。

「私もかなり危険だつてば！」

美琴も不安な表情をする。

「大丈夫だにゃー。3人力を合わせれば出来るつたあーい！」

十録 ヒロインのピンチを救えば…どんなに腐ったヤローでもヒーローになれる

いつもいつもご愛読ありがとうございます！

当麻と土御門はヒーローですね（@\_@）

はあ…やっぱりアクセラレータ強いっす…第一位の座は簡単には変わんないですね…

十七 絶望の黒い闇が舞い散る中、あなたは何を思っの……………。

ってミサカは

時に人は些細なことで孤独を感じてしまうけど、そんな気持ちも案外たわいもない事で小さくなります（-|-#）

自分は単純だから、普段あまり話さない人とちよつと話せただけで嬉しくなってしまう（T-T）笑

孤独な時もあるけど…そんな時は寂しいと誰かに言おう！言う相手がいない時は、隣家の犬を撫でよう！！

犬好きなんで…

十七 絶望の黒い闇が舞い散る中、あなたは何を思うの……………。

ってミサカは

3人は一方通行の前に並ぶ。

「よし！行くぞ。美琴こつちだ。」

当麻は美琴を引き連れ、一方通行へ真っ直ぐ突っ込む。何度も襲う衝撃を右手で消し去りながら前へ進む。2人は一方通行の目の前まで進む。その瞬間、後ろから土御門が一方通行に飛び付く。その手には携帯電話を持って。美琴もそれに合わせて、前から一方通行の首めがけて突っ込んだ。

「アクセラレータアア！よく聞くんた……」

その瞬間、土御門は衝撃で横に飛ばされる。

「ぐ……上やん……」

とつさに携帯を当麻に投げ、土御門は10mは飛ばされた。

「いい加減にしゃがれ！耳かっぱじって待つてろ……！」

当麻は衝撃を右手で消し、右手で一方通行を掴み耳に携帯を近づける。

「アクセラレータ！大丈夫だよ、ってミサカはミサカ言ってみる。」

一方通行の動きが止まる。その瞬間美琴は一方通行の首に付いてある装置に、電気を介した脳波リンクを作る。その結果、ラストオーダーの声は一方通行の脳に直接届くようになった。

「――あなたはわたしを守ってくれた強い人だってミサカはミサカは言いたい。大丈夫だよ！あなたに何があるうと離れたりしないからってミサカはミサカはあなたに気持ち伝える――」

一方通行の動きが止まる。そして、ヒュツと黒い羽が消え一方通行は地面に倒れた。

「終わったのか……？」

当麻は少し疑問を抱きながら一方通行を手でつつく。

「じゃあコイツはオレが連れて帰るわ。じゃあほんとに解散だにや……」

土御門はすぐに姿を消した。

「さてつと、俺たちも帰りますか。」

当麻は美琴に言う。

「……がとう。」

美琴は顔を赤く染めて呟く。

「んー何か言ったか!？」

「なんでもないわよ!ばか!」

美琴は笑っていた。2人はゆっくり歩いて階段を上り外に出ると、皆が待っていた。

「お姉様!」

「御坂さん!」

3人が美琴に詰め寄った。

「黒子!佐天さん!初春さん!ただいま。」

4人は抱き合った。皆一緒に帰ってこれた喜びを分かちあうように。それを、少し離れたところから見ていた上條当麻は微笑み、自分の住む学生寮に帰っていった。

「任務完了ご苦労様なりけるよ。さあわたしたちも家に帰りましょうよ。あの教会へ!」

ローラ・ステュアートがそう自然に言うため皆理解するのに時間を要した。

「はい!」

「えっ皆一緒に!？」

「教会つて……どーいうことですか!？」

「自分家に帰ります!わたし頭の花の変えがないと死んでしまいます……ってか困りますうきゃっ白井さん!頭の花取らないでください!」

「えっローラさん冗談ですよね!？ちよっ初春うるさい!白井さん御坂さん何とか言ってください!」

そんなこんなで皆で教会へ行く。

「そこのホテルよりベッドもシャワールームも凄いのよ!皆わく

わくしたれよ!」

ローラが一番胸を踊らせていた。パジャマパーティーと勘違いしているようだ。

十七 絶望の黒い闇が舞い散る中、あなたは何を思っの……。 ってミサカは

ご愛読ありがとうございます！

人間とはもろいものです…。次回もお楽しみに



十八 未知なる敵を前につかの間の休息！束の間…ちょっとした間、数分…数時間

皆様もありますかね！？休みの日…起きたら夕方でした（TOT）  
がっかり感ときたら…うう（＝＝）

十八 未知なる敵を前につかの間の休息！束の間…ちよつとの間、数分…数時間

教会の地下には、ホテルのスイートルームのような部屋が3つあった。

「すご…シャンデリア！つてこの部屋20畳くらいあるし！テレビもデカっ…！」

「お姉様お姉様！お風呂も2人で入っても悠々と足を伸ばせる大きさでしたわ～！わたくし絶対にお姉様とおっなじ部屋じゃないと嫌ですの！おっなじ部屋～！おっなじ部屋～！」

「うつるさい！」

ブリツと火花が散る。

「ちよつと！電化製品壊したら即出ていくことになれよ！」

ローラは電化製品に思い入れがあるらしい。

「じゃあ初春。私たちはあっちの部屋だね。」

「はい！佐天さん！」

佐天と初春も2人同じ部屋が良かったようだ。

そんなこんなで時刻は朝の7時を過ぎる。皆はローラが作った愛情たっぷりのご飯を食べ、

「まっず！」

「だいたいこのバタータルトに天使の愛が育むときなんて名前つけること自体頭おかしいですよ。」

「いやあ空腹には刺激的すぎますよね。お腹空いてるのにそれを忘れさせちゃう凄さは天使っぽい…つて初春！？」

「うつまい！」

皆ローラを気遣う気持ちも忘れ、素直に批評する。初春だけが、甘いタルトでお腹を満たした。

「じゃあ今日はもう休みましょう。起きたらこれからの話をしようぞ。」

ローラは入眠を促し皆を部屋まで誘導する。皆それぞれに思うこと

もあるが、身体的疲労が限界の4人はベッドに入るとすぐに深い眠りについた。

そのまま日付が変わる。そして、昼になる…夕方近い!?

「ーお…おー」

「いつまで寝たるか!コオラアア!」

ローラは目を血走らせドアを蹴り破る。

「ひい!」

美琴と黒子は飛びおき、お互いに身をよせ悲鳴をあげる。

「てめえらもう24時間以上寝てんだよクウラアアい!こっちはずつと放置かあい!ああ!」

ローラは口を捲し立てる。後ろから騒ぎを聞きつけて佐天と初春がやってくる。

「どうしたんで…」

そんな初春の言葉は届かず…ローラは止まらない。

「こっちは朝からもう3食作って待ってんだよ!わしゃてめえらの妻じゃねーんだよ!つか初春!てめえなんかは戦ってもねーのにそんなに寝るとは…いい度胸じゃねえかあああああ…」

「ひいひい…やあああ!」

ローラ・ステュアートに指揮官の威厳が初めて誕生した。皆は食堂に移動しミートのハニーホイップ似を食べ…

「オエツ」

「ちよつと黒子だめよ!」

紅茶を飲み一息付く。

「ふー。じゃあ少しこれからのこと話したるか。」

ローラが場をしきる。

「はいはい!じゃあ私がご飯作ります!」

「賛成!佐天さん料理上手だもんね。じゃあ黒子は買い出しね!」

「えー!お姉様も一緒に行きましようよ。」

「じゃあ私は何しましようかあ!?うーん…」

初春は頭を悩ませる。

「じゃあ私は皆の帰りを家で待つてる女房役するーって違う！違う！そんな小さな話じゃないたるよ…。」

皆がローラを寒い眼差しで見つめる。

「今回は皆無事逃げられたから良いたるも、これから先も佐天さんは狙われる立場にある。しかも、今回は美琴の能力覚醒まで演算したるし…より一層よね。だから、その根本である学園都市を潰してしまおうって話たるよ！」

「えー！！！」

ローラの言葉に皆驚いてしまった。

十八 未知なる敵を前につかの間の休息！束の間…ちょっとの間、数分…数時間

ご愛読ありがとうございます！

ローラ遂にやりました！威厳獲得ですw(。o。 ) w怒ったら普通の日本語になりました！笑

19 陸、空、海、無限大……。そして、ワンピース結成！（前書き）

なんか小組織っていいですね！

誰かとグループ組みたいっす（- - #）

## 19 陸、空、海、無限大……。そして、ワンピース結成！

「学園都市を潰すの……？私たちの居場所……。」

美琴も驚きを隠せない。

「そのための組織なの！？ワンピースって！？」

美琴は熱くなり真剣な表情で言う。

「えっワンピースって何なの！？」

何も知らない佐天は話が見えず初春に聞く。

「私たち佐天さんを助けに行くのにいろいろ助言もらって、その時にワンピースって組織を結成したんです。ローラさんが指揮官で……。」

ローラも真剣な表情で美琴に言う。

「そんなこと言いたるも、じゃあこれからどうしたるのか！？それ以外に道があるとお思いか！？」

美琴の顔が歪む。

「――佐天さんが捕まればまたあのレベル6の実験も始まる……。敵は

学園都市……か……。――

「能力開発だつて非人道的方法であるぞ！こんなこといつまで続けてよいと思うか！」

誰も言葉が出ない。ローラ・ステュアートだけが喋り続ける。

「終わらせなければならぬのだ！多くの犠牲を出したあの戦争だつて学園都市がある限りまだまだ続くのだぞ。ローマが敗れ、イギリスや学園都市も壊滅寸前の今がチャンスなのよ！今しかなからうよ！私たちが全て終わらせて新しい世界を……平和を掴みませんか！？」

美琴たちはただローラの気迫に押されていた。そんな大きなこととは思っていなかったのだ。

「……でも実際どうしますの！？勝算はあるんですの？」

黒子は信じられない様子で言う。

「学園都市統括理事長アレイスター・クロウリーを倒せばよいのよ！場所も知ってる。きつと簡単なり。」

ローラは簡潔にわかりやすく言った。

「ほんとに簡単なの！？簡単なのかな…ねえ黒子!？」

美琴は黒子のほうを見る。

「お姉様！きつと簡単ではないですわよ。あの人おかしいですし。」

「アンタに言われたくないたるよ!」

ローラは黒子の頭を叩いた。

「でも…。黒子！初春さん！そして佐天さん!…やろうよ。出来るかわかんないけど、それしかないよ！私たちが力を合わせれば何でも出来る。学園都市が敵なら…それを倒すまでよ！佐天さんは絶対渡さない!！」

美琴は皆を見てにこつと笑う。黒子と初春、佐天もにこつと微笑み顔を見合わせ頷く。

ローラ・ステュアートのもと、どこにも属さない小組織「ワンピース」結成の瞬間だった。そして、これから学園都市対彼女達の戦いが始まるうとしていた。



19 陸、空、海、無限大……。そして、ワンピース結成！（後書き）

ご愛読ありがとうございます！（＾・）

弐十 朝ご飯は皆で食べましょ（前書き）

よろしく願います！

## 式十 朝ご飯は皆で食べましょ

とある日、アレイスター・クロウリーはローラ・ステュアートに連絡をとっていた。

「お前の目論みは分かっている。目的何だ？」

アレイスターは言う。

「戦争でイギリス正教も学園都市も壊滅状態でしょ。良い機会たるよ。最大主教のわたしは魔術師達に組織の解散を命じたわ。」

ローラは髪をセットしながら話す。

「学園都市も終わりにしようぞ。」

ローラの言葉にアレイスターは笑う。

「組織を解散しようが何も変わらない。悪いヤツはいっぱいいるんだ。何も縛られない者たちが自由に暴れる世界になってしまうだろう。」

しかしローラは真っ直ぐに言う。

「でも、そこは個人の信念がある。そのように荒れ狂う者がもいるかもしれないが、何かを守るためそれに立ち向かう者もいる。組織は時に人を間違った方へ導く…まさしく今回の戦争たる。それなら組織などいらぬのよ。」

二人の間に沈黙が流れる。

アレイスターはゆっくり口を開く。

「やはり、君とは言葉で和解は無理そうだ…。」

「そうね。」

ローラもその言葉に納得する。

アレイスターは、では…と話を続けた。

「わたしは筒の中だ…。息をすることも地に立つことさえも放棄してしまった人間だ。わたしは戦うことが出来ない…。」

「ほう。」

とローラは疑いの言葉をかける。

「とある場所に、能力開発施設がある。そこでは学生達の脳をいじるだけでなく、様々なデータや研究結果が納められており学園都市の核となる施設だ。もちろん虚数学区・五行機関によって守られているがな。そこを潰し、わたしのところまで来たら君たちの勝ちだ。」

だが―

「ここまで来れるなんて思うなよ…。」

アレイスターはそう言うと言信が途絶えた。

「虚数学区・五行機関か…。」

ローラには解読できないが、未知の力を秘めていることに脅威を覚える。

「―はあどうしたもんかね…―」

髪を整えローラはとりあえず食堂に行く。

「ちょっと！ローラ遅いつ。待ちくたびれちゃったわよ。」

パジャマ姿の美琴が目の前のご飯だけを見つめて言う。

「おはようございます。とっくにご飯できてますよ。」

エプロン姿の佐天は味噌汁をお椀に注ぎながらいう。

「佐天さんのご飯はすごく美味しいんですよー！」

初春は自分のことであるかのように満足そうに言う。

「全く…毎朝8時に食堂集合って決めたのローラさんですよ。皆

待ってますわ。」

黒子は呆れた様子で言った。

ローラは深刻な顔して入ってきたつもりだったが…

「…なんか真剣に考えるのがバカらしくなるくらい…」

「あなた達朝からにぎやかなるのね。」

ローラは思わず笑った。

「…いや！ってこの子達くつろぎすぎなのよ…食事当番もすっかり奪われたるし…」

心では泣いた…。

式十 朝ご飯は皆で食べましょ（後書き）

「愛読ありがとうございます（＾－＾）」

式十巻 戦いに向けて！(前書き)

お願いしますう (トート)

## 式十巻 戦いに向けて！

朝ご飯を食べ一息つくと、ローラは皆を集めた。

「やることは決まった。でも敵は未知なる力を秘めたるわ。」

ローラにもわからない力…

「そこで、今日から3日間はスキルアップしましょ！」

ローラは意気込んで皆に提案する。

「スキルアップー！」

全員が驚いた。なぜならスキルアップは並々ならぬ努力が必要であり、短期間では不可能だからである。

「そんな簡単にスキルがあがるとは思えませんわ！」

黒子は半ば諦めモードだ。

「スキルアップにも色々あるわ。あなたはまず精神力を鍛えて動揺しないようにしたる。そして、もっと能力が応用できるはずよ！3日間よく考えたり。」

「応用ですの…。」

黒子は頭を抱えるも、何か考え出した様子でリビングを出て行った。

「初春はまずこれを調べて欲しいのよ。終わったら声かけたれよ。」

ローラは初春に資料を渡す。

「わ、わたしはスキルアップ無いですかあ！？」

初春は自分だけ雑用を頼まれた気分になりショックを受けている。

「終わったら良いものあげたるから！」

「うう…お駄賃に易々と乗ると思ったら大間違いなんですよー！」

初春は資料を持つと、走って自分の部屋に戻っていった。



「さてと…」

ローラは佐天と美琴を見る。

「では佐天さん。美琴のレベル6進化のあなたの演算、全て聞かせて欲しいのよ。」

「あ…」

美琴も耳を傾ける。

佐天はゆっくり思い出しながら話します。

「えーと、多彩能力になれるのは学園都市の中でレベル5の第3位である電撃使いのみ。第3位より上位のレベル5のどちらかとの戦闘時に、あの時のようにして…それで……」

佐天の言葉がつまる。

「で…続きは？」

美琴が意味深に聞く。

「能力が完全覚醒し暴走すると学園都市全域の能力者と磁力を介したネットワークを構築…第3位の電撃使いはAIM拡散力場の集合体に肉体をのまれ虚数学区となるって…」

佐天は恐る恐る美琴を見る。

「…っ！」

「そ…そーいわれてもよくわからないわ。私自信がAIMバーストみたいになるってことかしら…？」

美琴は首を傾げてローラを見る。

「ローラ…??」

ローラは真剣な顔をし考えことをしていた。

「虚数学区…」

「ーなんか…嫌な予感がしたるわー  
ローラの表情から不安は消えない。」

「美琴はスキルの制御に専念したれよ。その能力を自由自在にかつ  
コントロールできるように！」

決戦は4日後の午前0時。果たしてスキルアップは上手くいくのか  
…。

弐十巻 戦いに向けて！(後書き)

ありがとうございましたあ (@\_@)

**式十式 スキルアップ発表会！（前書き）**

お願いします！

## 式十式 スキルアップ発表会！

「スキルの制御つつたつて…どーすればいいのよー！」

美琴は頭を悩ませていた。

「ですね！私にも何がなんやらサッパリなんですよねー。」

佐天もお手上げ状態だ。

「でも、とりあえず佐天さんが半径50M以内にいれば脳波をリンク出来ることがわかったわ。あと佐天さんがいなくても半径50M以内にいる能力者とはリンク出来るみたいだわ。演算能力をあげることは出来ないけど。」

美琴は自身の能力を分析する。

「大丈夫ですよ！私御坂さんから離れませんから！おりゃー！！！」

佐天は美琴に抱きついた。

「ちよっ黒子みたいなこと止めなさいよー！」

美琴は変態が増えと呆れてしまう。

「はあー。」

美琴は行き詰まってしまった…

3日後…

初春はローラに渡された資料を完璧に調べてきた。

「どーですか！」

初春は得意気だ。ローラは資料に目を通す。

「何々…ほうほう。初春よくやったり！皆これで次攻める建物の情報に完璧よ！じゃあ初春にはこれを授けたるよ。」

ローラは箱をさしだす。

「手袋とボール…？えーと、野球しろってことですか！？」

初春は全然望まない物を前にどーでもいい質問をする。

「その手袋は外の熱を中に通さないように出来てるのよ。薄い特殊な素材で出来てるから、初春の能力は手袋の中からでも使えるようにできたるよ。」

「えっ！」

初春は驚く。

「そのボールは中に液体が入っていて外のスイッチで100 からマイナス100 まで設定できるようになったよ。軽くぶつければ割れたるから好きに使うがいいわ。」

ローラは微笑んだ。

「ローラさあん！私のことそんなにわかってくれてたなんて…嬉しいです！これで私も戦えるんですね！わぁ！」

初春は感動している。早くボールを試してみたくて待ちきれない様子だ。

「初春いいなあー！」

佐天は羨望の眼差しを向ける。

「あなたにはこれを授けたるよ。」

佐天の気持ちを汲み取り、ローラはそつと差し出す。

「バット…。私はほんとに野球してろってことですかー？」

「そうね！ヘルメットも授けるのよ！」

佐天はがっかりした。

「で、あなたはとうだったの！？スキルアップしたるか？」

ローラがそう言うと、皆黒子に注目する。

「ふふふ。もちろんですわ！まずわたくしは滝修行をいたしましたの。精神的に強くなりましたわ。」

黒子は自信に満ち溢れた様子。

「ほんとかしら…。何かあの子ただ強気になっただけじゃない！？」  
「お姉様！そんなことはなくてよ。ふふふ。そして、これが能力の

応用ですよ！」

シュンシュン！

「おおー… って雰囲気ですって見たけど何のことやらわかりかねるが、何してたるの？」

ローラは首を傾げた。

「何もしてないじゃないの！」

美琴も不満そうだ。

「いいえ！もう今レポートしてますのよ。」

ローラ達から10M後ろより聞こえる声に皆驚く。

「えっ！どうして！？」

「白井さんすごいです！！」

「わたくし考えましたの。レポート前で中断してすぐにレポートすると黒子の残存が現れますの。名付けて二重の極みですわ！！」

「あれ…何か聞いたことあるわね。黒子…あんだ滝修行の時サボって漫画読んでたわね！？」

「な…何言ってますの！？お姉様！」

「いやぁ白井さんそーきましたか！」

「なな…何かありまして！？佐天さん！？」

「白井さんパクリですよね？」

「初春！失礼ですよ！！」

「悪一文字の人に謝れよ！！」

「外人のくせして日本漫画に詳しいじゃありませんの！もうわたくし決めましたのでネーミングは変えませんのよ！」

決戦まであと6時間。 作戦を練らなければ…



式十式 スキルアップ発表会！（後書き）

読んでいただきありがとうございます！めちゃくちゃですみません

## 式十参 決戦

決戦の日はきた。時刻は午前零時。5人はとある研究施設の前にいる。

「久しぶりに思いっきり力出せそんな気がするわ!」

「私御坂さんから離れませんか!」

美琴は佐天を見てうなづく。

「佐天さんは命に変えても私が守るわ!」

「私たちもお姉様を援護しますわ!」

黒子と初春もうなづく。

「さあ行きたるぞ!今回は施設の完全撃破が目的たる。皆片っ端から壊すのよ!そして最上階12階の管理室のコンピューターを壊せ!」

「はい!」

「そして、わかってたるわね…。」

「危ない時は逃げるですわ。」

黒子の答えに皆頷く。

ローラは少し心配そうな表情で微笑み皆を見た。

「そうなるよ。4人無事で必ず帰ってくること。じゃあ皆の平和のために戦いたるよ!」

研究施設の入り口前で美琴は皆の一步前に出る。

「皆離れてて。」

美琴を中心に太さ5M以上もの眩い光が天上に向かい登っていく。

「さあ行くわよ！」

美琴が両手を前に差し出すと、天高く登っていた電撃が音速を越える速さで放たれる。

ゴォー！！

研究施設の入り口を粉々にした電撃は、ケーブルや電線に伝わり施設全体が停電するも、すぐに予備電力に切り替わり電気機器が復旧する。1階部分の壁は外まで貫通し、机・パソコンや警備口ボまでも全て黒焦げとなり、プスプスと煙があがっていた。

「まだまだ力が有り余ってる。こんなんじゃ全然物足りない…この施設を潰すわよ！」

美琴は前に進む。

「すご…なんかさすが御坂さんですね。ちょっと道具もらったからって調子に乗ってる誰かとは大違いです！」

「佐天さん…ばかにしてますね！ぶんつ。」

初春が横を向くと、何やら考えことをしている黒子に気付く。

「白井さん…？」

「…」

「ーお姉様…何かやみくもに力を使ってるっしやいません！？いやっ心配しすぎですわね。レベル6ですもの。力が有り余るのは当然のことですわ…よねー」

4人は2階へ進んだ。

ー 研究施設 8 階ー

金髪のロングヘアーに大きな目をした高校生くらいの女の子ヒトミは異変に気付く。

「なんか停電したり騒がしいし。どしたんだろ。まさか!？」

「例のやつらが乗り込んで来たんじゃないの? まあ 1 階から 7 階まで各階に警備ロボ 50 体とトラップ張り巡らしてるし、来れねーだろ。来たらボコボコにするまでよ!」

金髪にピンクのメッシュを入れたセミロングヘアーで鋭い目をしたヤンキー風な女の子マイは嬉しそうに言った。

「戦い続けてボロボロになったレベル 5 なんて相手になんないかもね!」

「あはは!」

ー 研究施設 2 階ー

ゴォ!!

電磁波が飛び交っていた。

全長 1M ちよつとの警備ロボの中には電気光線や小さな核弾頭や催眠ガスを放つものもいれば、両手足が生え人間のようには武器を手にとり襲ってくるものもあり、ロボによって機能は様々だ。

「ほんとどっかの都市の能力者みたいね!」

と言いながら美琴はゴォツと超電磁砲を放つ。

美琴の周囲からは蒼白い光が放たれていた。

式十四 エレクトロマスター（前書き）

びり  
びり

## 式十四 エレクトロマスター

黒子はその辺の瓦礫を使い攻撃し、初春はマイナス百度のボールをぶつけ凍ったところを佐天がバットで叩き壊していた。

「ふーっ。」

「きゃあっ」

佐天を後ろから押さえ馬乗りになる警備ロボ。目のような部分から催眠ガスを出す。後ろには手に拳銃を持った警備ロボが今にも撃たんとしていた。

「……！」

佐天は恐怖で声も出ない。

――死ぬ！――

パン！

「……あれ。」

銃声になるも佐天は無傷であり眠たくもなかった。

理由は最強の電撃使い。蒼白い光に包まれた彼女はこのフロア全体の出来事が把握できた。

佐天に降り注ぐ催眠ガスを音速以上の速さで放たれる電撃の衝撃波で撒き散らし、拳銃から弾が出た瞬間磁力で真横に飛ばし隣にいた警備ロボを破壊していた。

彼女はすでにこの場を支配していたのだ。

「皆そこを動かないで。」

美琴は佐天や初春・黒子を大量の鉄筋で覆うと、電撃をフロア全体へ放つ。

ゴォォォー！！

と凄まじい音が響いた。

音が止まるのを確認した黒子は、初春・佐天とともに鉄筋のドームの中からレポートする。

「お…お姉様。」

辺り一面真っ黒に焦げ付いた中、美琴だけが蒼白く光輝いている。

その圧倒的な力に黒子の背筋は凍る。黒子には無い力だ。

初春・佐天もその力に驚いているも、憧れのほうが強いようだ。

「すごい！」

2人はテンション高く喜んでいる。

「よし！先へ進むわよ。」

「お姉様！大丈夫ですよ！？力を使いすぎでは…」

「大丈夫よ！黒子。私本当に力がみなぎって溢れ出す感じがわかるの。これがレベル6の力なのかしら…。」

美琴は1フロアずつ、全てを焼き付くしていった。

そして8階へ。

「ここは警備口ボいないみたいね。」

美琴は辺りを見渡す。

その時、4人は急に身体が重たくなった。

「なっ……」

「な……何事ですよ！？急に身体が……」

「ダメです……私立ってられないです。」

佐天と初春はその場にひざまつく。

「重力20倍なんだけど。どうかな！？」

右手を4人に向けヒトミは言った。

「くっ……」

「ヒトミ！レールガンはまだ動けるみたいだ。」

「うそ！？じゃああなたは私の最大出力重力50倍おみまいするし  
！」

「お……おもっ……」

美琴は思わず膝を床に付く。

「……黒子……動ける？」

「ゆっくりなら可能ですが……でも演算は少し難しそうですわ……。」

「なーにしゃべってんだよ！」

ヤンキー風な女の子マイが美琴の前に立つ。



「ねえ重たい？」

マイは美琴の顎に手をおき上に持ち上げる。

「助けて欲しかったらそう言ってみてよ！」

マイは美琴に顔を近づけ言う。

「あんたは…ドSか！」

美琴がそう叫ぶと思わず頭から電撃が漏れる。それが直撃するもマイは微動だにしない。

「私もエレクトロマスターだ！んなもん効くか！」  
マイは笑っていた。

## 式十四 エレクトロマスター（後書き）

ありがとうございました

弐十伍 エレクトロマスターとエレクトロマスター（前書き）

お願いします！

## 式十伍 エレクトロマスターとエレクトロマスター

「エレクトロマスターって…」

美琴は驚く。

「…なんかやりにくそうねー」

「レベルは4だけど私はてめえに負けてるつもりはない！」

「私もいるし！どーする！？絶対絶命ってかんじ！あはは！」

ヒトミも後から続く。

美琴はもう1度電撃を2人に向け放つも、マイがヒトミを抱え後ろによける。その一瞬重力から解放されるもすぐにまた身体が重たくなった。

「黒子…まずあの重力女を倒すわよ。」

「はい…でもどうやって!？」

「あの…右手の前にいるものにしか重力は使えないわ。私が電撃であいつを攻撃するから一瞬でも重力がなくなったらレポートして…初春さん、佐天さんも出来る限り散らばって欲しい。」

「…わかりました。」

「やってみます。」

「じゃあ…」

美琴は全身に電撃を溜める。

「ちよっ…何する気!？」

ヒトミは美琴の様子に焦っている。

「ーもう重力最大なんだけど…なんで力溜めれんの!?ー」

「ヒトミ! 避けないとやべーよ!」

マイも電撃が効かないとはいえ警戒している様子。

「うー…行くわよ!」

美琴は右手をゆっくり前に出し、ヒトミに向け電撃を放つ。ヒトミは慌てて横に転がり回避する。

「いまよ!」

その瞬間重力から解放される。初春・佐天は左右に分かれ走り、黒子はヒトミの背後にテレポートする。

少し遅れてヒトミも背後に忍び寄る気配に気付いた。

「やばっ!」

「そんなことだろーと思っただよ!」

マイは作戦を読んでいたかのように黒子に攻撃をしかけようとしていた。

「そうはさせない! あんたにも体感してもらっわ。重力50倍をね!」

「なっ…身体が」

マイは床に倒れこんだ。

「なんで…ヒトミの能力が!? そーいえば…忘れてた…」

「そーいうことですわ! それではまずあなたから。」

黒子はヒトミの身体を空中へテレポートさせる。

「わわ…いたあ!」

ヒトミは5Mくらい落下し地面に叩きつけられる。そこへすかさず

美琴が電撃を放ちヒトミを直撃し、そのまま気絶してしまった。

「くっ…こうなったら…」

キイイーーーー

「うう…これって…」

美琴は頭を押さえる。

「キャパシティダウン…ですの!？」

「ふふ…私のポケットにはキャパシティダウン…のスイッチが入ってるんだよ!」

マイは頭を押さえながら言う。

「そ…そんなことしても…あんただって能力者じゃない…」  
美琴は訳が分からない様子で言った。

「確かに…私も能力を使えなくなるけど…でもめえはレベル6…能力的に不利になった時リセットするのに使えるんだよお…」

「こ…こいつ…」

「――長期戦狙いなわけ――」

貳十伍 エレクトロマスターとエレクトロマスター（後書き）

ありがとうございました！

## 式十六 最強のエレクトロマスター（前書き）

最強決定戦です…



## 式十六 最強のエレクトロマスター

マイはキャパシティダウンのスイッチを切る。

「行くぞ！」

マイは全身に力を込め電撃を精一杯溜め、美琴に向けて一気に放つ。

「電撃攻撃とはいいい度胸してるわね。」

美琴も力を込め、さらに大きな電撃を放つ。それはマイの放った電撃を飲み込み、そのまま直進していく。

「どのくらい高圧な電撃まで耐えられるのかしらね。」

美琴はマイに問いかける。

「ふふ……」

その電撃はマイに直撃せず、彼女の周囲を取り囲んだ。

「えっ！？」

「あんたは最強のエレクトロマスターだから知らなかったかも知らねーけど、エレクトロマスターは電撃を吸収して一時的に力をUPさせることができるんだよ！私ではてめえを倒すために対エレクトロマスター戦を常に研究してきた…今こそ私が最強になる時だ！」

「そんなのアリ！？」

美琴は驚く。

「でもね、今の全力でも何でもないわよ。」

美琴は平然と言う。

「強がつてんじゃねーよ！」

マイは腹立ちを隠しきれず、全力で電撃を放った。さっきとは比べ物にならない大きさだ。

「あんただけは電撃で倒したいわ。行くわよ！」

美琴は右手を前に出し、力を溜め電撃を放つ。2つの電撃がぶつかり直線を描くも、すぐに片方の電撃がもう一方の電撃をおしきり直進していく。

「くっ…」

マイはその電撃をまたまた吸収する。

「はあはあ…」

「力を吸収するのも体力いるのね。」

美琴は涼しい顔で話す。

「次は私も全力で行くわよ！」

「くっ…来てみる！！決着をつけてやる！てめえは私が倒してやるんだからな！」

マイは目を血走らせ力を溜める。

「ー私が最強だ…私が最強になるんだああ…！ー」

美琴は全身から眩い蒼白い光を出す。眩しすぎて直視できないほどに。

そして、再び2つの電撃はぶつかりあった。

辺り一面雷のような光に包まれるも、一つの光が直進しドゴオと壁を破壊する。

マイは電撃に押され身体が壁を直撃し、その場に倒れた。

「な…なんで電撃が効くんだ…!?!」

マイは痛みをこらえながら不思議な表情をしている。

「そんなの簡単な話よ。私が最強のエレクトロマスターだからよ！  
なあんてね。」

「けつ。」

「でもあんたもなかなか凄かったわ。勉強にもなったし。」  
美琴は笑顔を向ける。

「次は絶対に倒すからな！」

「はいはい。」

美琴は振り返り3人を見る。

「よし。じゃあ先に進みますか！」

「おいっ」

マイが起き上がろうとしながら話しかける。

「こっから先は…能力者はいない。レベル6のめえはマネできる  
からな。私らでさえ行ったことねーし、何がいるかわかんない。き  
…気をつけるよ。」

「もちろん！その助言有り難く受け取らせてもらっわ。」

美琴たち4人は9階へ進んで行った。

## 式十六 最強のエレクトロマスター（後書き）

ありがとうございました。

式十七 作りものの能力……！？（前書き）

お願いします（＾－＾）

## 式十七 作りものの能力…！？

研究施設9階。

ここは学生の脳をいじっている場所のようだ。診察台と医療機器、パソコンが並んでいる。

「なんか静かで不気味ね。」

このフロアだけ病院のような、異様な雰囲気の流れる。警備ロボも能力者もない。

美琴たちは奥へと進んで行った。

とある部屋に白髪の70歳くらいの研究員と思われる白衣を着たおじいちゃんが机に向かっている。

「ぎゃあー！！」

美琴たち4人はお化けと間違え驚き悲鳴をあげる。

「おや…。」

「ひ…しゃべった。」

4人はいまだに幽霊を見るような目で老人を見つめた。

「こんにちわ。君たちは能力者かのお？」

「は…はい。」

「おや…君はレベル5の…御坂くんじゃったかの。」

「あ…はい。私のことご存知ですか？」

「もちろんじゃとも。君はここで能力開発されたのじゃから。」

「えっ!？」

「ーそうだったっけ!? 言われてみれば見覚えあるような…ー」

「君たちレベル5の能力開発は大変じゃった…」

「えっ…」

「ーどういうこと…私レベル1から努力でレベル5まであがったのにこれじゃまるで…ー」

美琴に衝撃が走る。

「どういうことですか? 能力開発の手助けはしても、その後の能力は個人のパーソナルリアリティーによるもの。レベルだってそうですわよね!? あなたの言い方じゃまるで能力開発のされ方で能力もレベルも決まるというように聞こえますわ!」

黒子は信じられない様子で言う。

「その通りじゃよ。能力開発は平等ではない。全て統括理事会の言うことに従い能力を振り分けてきたに過ぎないのじゃ…。」

「ウソ…そんなのウソよ!! 私は自分で努力したんだから…絶対にそんなの信じない!」

美琴はわなわなと震えていた。今まで自分が築きあげてきたものが崩れそうになる。

「ー誰かウソだと言って…ー」



「ウソじゃないんじや。レベル5はわしらの開発の最高傑作じゃから。」

老人は続けた。

「能力開発はパーソナルリアリティーの獲得だと言っているが実際は違うんじやよ…。本当は死体から情報を採取してるんじや。パイロキネシストの時は火炙りでじわじわ焼かれた人間の脳や細胞から情報をとったのお…」

美琴は激しい寒気に襲われる。

「君の能力は8歳くらいの子じゃったかな…。雷の電圧を徐々にあげて情報をとったのお…。あの子泣き叫んでおったな。いやいや…。悪いことをしたが、全て君のためじや。」

その老人の言葉に美琴は床に座り込み、愕然とする。

「…う…うそでしょ…」

「お姉様信じてはダメですよ！これは作り話ですよ！お姉様！！」  
黒子はしゃがみ込み美琴の両肩に手を置く。

「お姉様…」

「…。」

美琴は全く反応しなかった。

式十七 作りものの能力…！？（後書き）

すみません…完全なるフィクションです（^ー^）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5458m/>

---

夢のレベル6！？皆暴走しろー！！

2010年11月3日01時17分発行